

# 嵯峨・嵐山の観光先駆者

—風間八左衛門と小林吉明らによる嵐山温泉・嵯峨遊園両社を中心に—

Originators of Resort Developments at the Saga and Arashiyama:

Focusing on the “RANZAN” Spa Company and the “Saga” Park Company Promoted  
by Hachizaemon KAZAMA and Yoshiaki KOBAYASHI

小 川 功

## 要 旨

京都の洛西地区の地主・名望家グループの風間八左衛門、小林吉明らは町村長・議員等として地域の行政・政治に関わる一方、明治30年代から40年代にかけて地元の嵯峨・嵐山の地域振興、観光振興を目論み、名勝旧跡の保存・紹介、嵐山焼など名産品の開発を行う傍ら、①温泉会社、②遊園会社、③水力電気、④銀行等を共同で発起した。本稿ではこのうち嵐山温泉、嵯峨遊園両社を取り上げたが、彼らは外人観光客を対象とした名所案内、環境整備等にも努力し、外人誘致にも貢献した。①嵐山温泉は無色透明の炭酸冷泉であったが、渡月橋畔から船で嵐峡の清流を遡る風景絶佳の地にある老舗旅館として内外の観光客に愛好された。また②嵯峨遊園は葛野郡による嵐山公園設置の経費を使用料として調達する意味から、公園内に遊覧客向の建物を数軒新築し飲食・遊興業者に賃貸するという官設公園内の民営代行から出発した。設立に当って同社が「営利を専らとせず、成る可く公衆の利便に資する」旨を謳ったように、京都市内の投資家集団が買収した嵐山三軒家や、嵐山に広大な別荘を建築しようとした内外の資産家等の行動に比し、小林らの行動は地元の振興を第一義とするものであったと評価できよう。しかし③清滝川水力電気が創立早々に川崎・松方系統の嵐山電車軌道への身売りを余儀なくされたように、巨額の資金を固定化させがちな風間・小林派の関係企業は概して苦難の道を歩み、昭和2年の金融恐慌で彼らが共同出資した旗艦・④嵯峨銀行が破綻すると、嵐山焼の廃絶に象徴されるように、上記の両社を除き多くの関係企業の衰退を招いた。その後も彼らの意志を継承する子孫等により、嵐山焼の再興が幾度も企画されたり、近年でも嵐山に本格的な温泉を掘削・導入するなど地元資本による観光振興策が試みられる一方、残念ながら長い歴史を有する老舗旅館・嵐峡館が休業を余儀なくされ、大手観光資本により買収・改名されるなどの変化が見られる。大幅改装後の同館が期待通り内外貴賓の接待所の機能を果たすならば創設者の意にも沿う展開であろう。

全国的にも著名な観光地の嵯峨・嵐山地区が今日のような地位を得るには永年にわたり関係者の弛まぬ努力があったが、残念ながら近年の研究<sup>(1)</sup>でも解明が不十分な事情もあって必ずしも先駆者への顕彰が十分になされているわけではない。それは特定企業・特定個人による卓抜した寄与というよりは、幅広い関係者の地道な努力の集大成、それらの永年の蓄積によるため、少数の先駆者を絞り込み特定することが困難なためでもあろう。

一般的には観光地が確固たる地位を確立するのに大きく寄与するのが私鉄等である場合が多い。嵯峨・嵐山でも京都鉄道（京鉄）、嵐山電車軌道（嵐電）、新京阪鉄道、愛宕山鉄道など戦前派の私鉄や近年の JR 西日本、嵯峨野観光鉄道まで交通業者の果たした役割はいうまでもない。ただし嵐電などを除けば嵯峨・嵐山地区あるいは洛西地区のみに立地する私鉄は少なく、大企業ほど地元との関係はやや希薄であることは否めない。また早くから嵯峨・嵐山地区に広大な別邸を構えた川崎正蔵<sup>(2)</sup>、大谷光瑩（対嵐山房）、昭和戦前期の大辺男（大河内伝次郎）や、主に大正バブル期に投資目的で広大な山林を買収した静藤治郎、奥村猛ら府内外の別荘主による開発行為が果たした役割・功罪も看過できないものがある。しかし本稿では府外および旧京都市（昭和6年の周辺市町村編入前）の外部資本を一応対象外として、嵯峨・嵐山ないし洛西地区の地元資本に焦点を当てて、彼らが当該地区の明治・大正期の観光開発・観光振興にいかなる役割を果たしたかを可能な限り解明してみたいと考えた。

明治期の嵯峨・嵐山地区に所在した観光業者としては①元禄期開業の小林友次郎経営「三友楼」、②「きくや（菊屋）」（明治30年古川金治郎経営、現「渡月亭」へ）、③旗亭「八賞軒」（明治32年川崎正蔵が買収し、個人別荘「延命閣」へ）、④明治28年公有地貸下出願、明治30年5月設立の嵐山温泉（株）、⑤「花の家」など「雪、月、花の三楼」（俗に「三軒家」）を明治30年



写真－1 『嵯峨名勝』巻末付録の嵐山周辺図（明治43年）

買収すべく、京都商業会議所メンバー主体に発起された嵐山三軒家（株）、⑥嵐山（亀山）公園開設と表裏一体の嵯峨遊園（株）など少なくとも数者は確認できる。このうち名高い三軒家については別稿を予定している。[写真－1]の明治43年刊行の地図には大堰川に沿って三軒家、対嵐山房、八賞軒、亀山公園、対岸の〈嵐山〉温泉などが記載されている。

ただし①～③の純然たる個人営業の旅館・料亭等は公表された経営情報が乏しく、詳細な経営実態は未詳である。そこで当初から株式会社組織で出発した④～⑥のうち地元資本主導の嵐山温泉と嵯峨遊園の2社を中心に、両社の株主・支援者集団として風間八左衛門と小林吉明という2名の洛西地区の地元名望家を中心とするネット・ワークの存在を仮説として提示したい。本稿では新聞・雑誌、会社録、頻出史料は略号<sup>(3)</sup>で本文中に示した。

## 1. 風間八左衛門

上記④嵐山温泉（株）の中心人物で嵯峨遊園取締役の風間八左衛門は「下桂村今堂の旧家で代々八左衛門を名乗って」（史西，p53）、「鍋屋と称して醤油，油商を営み，十数代を経た京都屈指の豪家」<sup>(4)</sup>で先代風間八左衛門<sup>(5)</sup>の長男嘉一として明治12年6月27日生まれ，明治35年国学院で漢学を学び，「性慧敏頗る学を好む，夙に専門の学を修め造詣最深し」（実辞，カ p31），明治40年家督相続，明治40年の京都府第五位の多額納税者，1,115,983 円（日韓，上 p115）「桂から京都の街まで出るのに，他人の土地を踏まずに行ける」（三電，p39）と称されたほどの大地主であった。家業の塩醤油卸小売（商信 M42，p42）の傍ら，大正9年5月代議士初当選（政友会所属），大正13年1月脱党し新政倶楽部結成に参加（T13.1.22 大毎），大正14年貴族院議員（貴族院研究会所属）に互選された政治家でもあった。桂の自宅，祇園に事務所を設置して，「曩に清滝川水力電気株式会社創立に与り，専務取締役として社務一切を掌握り敏腕の名頗る高し」（実辞，カ p31），明治43年9月三幣保，熊谷少間（東讃電気軌道専務）らと丸亀瓦斯発起人，明治43年4月の創立時より川崎・松方系統の東海生命取締役，大正5年では山陰起業，京都人造肥料各社長，旭陶器，広島瓦斯各取締役（帝 T5，職 p96），大正7年では京都人造肥料，山陰起業各社長，嵯峨遊園，旭陶器，広島電気軌道，日新電機，若桜木材乾留，広島瓦斯各取締役，嵯峨銀行監査役（人 T7，カ p132），帝国工業社長，三国紡績常務，帝国石油取締役，長門起業炭礫監査役（T9.5.13 日出），愛国生命，桑船銀行，バグナル（電気器具販売）各重役<sup>(6)</sup>，栗太銀行頭取，江南商事重役，太湖汽船社長，琵琶湖鉄道汽船監査役（鉄軌，p366），湖南汽船社長，愛宕山鉄道発起人総代<sup>(7)</sup>・社長，バグナル社長，国東鉄道2,000株以上の大株主（鉄軌，p552）社長，会長，日本活動写真副社長，広島瓦斯，広島瓦斯電軌，キングタクシー，日新電機，台湾合同電気各取締役，三和電気土木工事，朝鮮三和電気土木工事各社長，京阪系の鞍馬電気鉄道などその他十余社の役員を兼務し，新京阪鉄道に地元選出の政友会代議士・吉村伊助からの帝国電灯の舞鶴支店買収話を持ち込むなど（生活，p149），京阪の太田社長とは親しく，しばしば京阪

の外延的拡大に尽力した。広島瓦斯 820 株所有、大正 9 年ころの筑豊炭礦株式会社大株主（五福商店の推奨広告 T9. 11. 15 大毎⑧）。昭和 4 年 2 月 5 日国東鉄道会長就任、昭和 8 年時点では、国東鉄道、太湖汽船各社長、日本活動写真、バグナル、大分セメント、四国水力電気、鞍馬電気鉄道、京都名所遊覧乗合自動車、京津自動車、湖東汽船各取締役（要 S8、役上 p173）、自ら中心になって出願した愛宕山鉄道社長、貞光電力取締役、合同電気監査役、日本共立生命相談役（人鑑、カ p52）を兼ねていた。『三電工・六十年のあゆみ』は初代風間社長を「でっぶり太った堂々たる体軀…頭が切れ、先を見る眼があった。大家の坊っちゃんとして育ちながらも、よく世情に通じ、部下の面倒見もよく、部下にも信頼されていた。また、人あたりもよく社交術も秀でていた」（三電、p39）と評している。「平常東奔西走席温かならず。以て尋常一様の若旦那に非ざる」（T9. 5. 13 日出）、「文字通り京都政財界の立役者である。実業界に於いてはその関係する事業は実に十余指に及び、京都実業界に氏の息のかからぬものは先づない」<sup>(8)</sup>と高く評価された反面、「約二十年間二重ル政治生活ニ家計ヲ顧ミズ、加之幾多ノ事業ヲ企テタ」<sup>(9)</sup>との辛口の評もある。地元の地域振興・観光振興を自己の責務と考えた名望家から出発しつつ、次第に活躍の範囲を全国に拡大していく中、彼の多彩な兼務先を見ると、出身地京都の土地柄もあるのか、京都府乗合自動車組合長に推されるなどやはり観光・運輸分野に傾斜する風間の性向が見て取れる。昭和 17 年国東鉄道社長として株主総会へ出張中に別府の旅館で脳溢血で倒れ、昭和 17 年 2 月貴族院議員辞職を申し出て<sup>(10)</sup>、同年 10 月 21 日桂の自宅で逝去、享年 64（S17. 10. 23 東朝）。訃報では「京都の資産家で貴族院議員…日活の恩人であり、邦画界の功労者」（S5. 2. 28T）とされた。長男の嘉雄<sup>(11)</sup>が家督相続、昭和 18 年 3 月 5 日襲名（商登）、桂離宮近くの御霊神社東端に風間八左衛門の大口寄進を示す石柱がある。

## 2. 小林吉明

上記⑥嵯峨遊園（株）の初代社長で嵐山温泉監査役の小林吉明（嵯峨村上嵯峨）は明治 2 年 12 月 6 日「代々嵯峨御所大覚寺門跡に仕へ」<sup>(12)</sup>た家に生まれ、明治 39 年出願の嵐山電気鉄道発起人、嵯峨銀行取締役（日韓、上、p113）、嵯峨遊園社長（諸 M45、上 p305）、清滝川水力電気監査役（日韓、上、p115）、嵯峨銀行頭取、嵯峨遊園社長、山陰起業、銭屋商会各取締役（人 T7、こ p13）、「貨物装飾及一般信託」（帝 T5、p45）の（株）銭屋商会、京都人造肥料各取締役（帝 T5、職 p208）、玉川織布取締役、三好屋商店監査役、洛西開発合資出資社員、銭屋商会の譲渡先の京都信託創立委員等を兼ねた。銭屋商会 500 株主（帝 T5、p45）、嵯峨銀行旧 350、新 880 株主。

また嵯峨村長・町長等を歴任し「個人として…町村の政治に携はって来て、今日まで之を守り立てて来た一人」（編入、p7）と自負するごとく、昭和 6 年京都市合併前の嵯峨町の最後の町長であった。勲七等、大正 4 年 12 月 2 日「審査候処左の如し。資性剛毅曾て村長の職を奉し常に



心を地方自治の発達に注ぎ合村を実行して村の基礎を鞏固ならしめ学区を統一し校舎を改築して教育を奨め道路を改修し橋梁を架設して交通に便し養水池を修治して旱害を除き殊に電車鉄道の布設に幹旋尽力して之れか開通を見るに至らしめ其他力を衛生の設備産業の発達又は名所旧蹟の保存に竭したる等洵に公衆の利益を興し成績著明なりとす因て褒章条例第1条に拠り藍綬褒章下賜相成可然と認定候条此段上申す」<sup>13</sup>との理由で藍授褒章を授与された。

さらに別の一面として双湖庵桂陰と号した俳人で「和歌俳句等の文藝を嗜みて之れを郷黨に奨励」<sup>14</sup>した。明治29年に「一々名所旧跡の由緒沿革あるは古今の吟詠をしるせり」（嵯図、p45）とした『都のいぬる』を刊行し嵯峨名勝を広く世に紹介した。小林の家業は陶器小売金貸（商信M42、p97）で、「竈を拵へ土を取るに因みて嵯峨の手ひねりと名づけ」（案内、p875）た初代閑嵯が明治30年死亡した頃から「同好の士を集めてしぶい焼物をはじめ…嵐山焼と名づけ」<sup>15</sup>、嵯峨名産として盛んに売り出した。彼自身も「かく云ふ著者も其〈嵐山焼てふ陶器〉作り主の一人にしあれば、品柄のよしあしを自らはいはず、釈迦堂前の三楽舎、あるは渡月橋頭の渡月亭などを訪ふて見よかし」（嵯図、p45）と宣伝に努めるように、「近年野の宮の土器のふる事にちなみて作れる三楽舎の陶器」（嵯名、p46）を「嵐山焼」と名付け、「洛西嵯峨の嵐山焼…の本元にして同地小林吉明氏等が組織に係る三楽舎にては今回更らに業務を拡張し嵐山近傍に二三の売捌所を増設」（M30.4.6日出）、嵐山焼など「是等の銘産類を集めたる嵐山商会の売店は嵐山電車の停留場構内に在り」（嵯名、p46）、陶器小売を主体とした土産物製造・販売の地場観光業者としての性格が濃厚であったと考えられる。

明治30年蒸気鉄道（「ゆけ〈湯気〉の車」）として京都鉄道が嵯峨まで開通した時には「小鹿なく此山里に思ひきやゆけの車の笛きかむとは」（M30.2.11日出）との歓迎の一首を寄せ、後年には「鉄道の開通と云ふことが著しく嵯峨の面目を新にし、嵯峨の気分を変えた」<sup>16</sup>と回顧した。開通時に前著の要約版として出した『嵯峨名勝案内図会』で「されど今は鉄路もひらけ…今の王公将相も…閑邸幽居を構へぬべき気運も見えけるこそ悦ばしけれ。あはれ皆来よ此里に、あはれ皆探れこの名跡を」（嵯図、p4）と京鉄開通を機に広く別荘設置・旧跡探勝を呼び掛けた。「以上記述する所は、我が里の名所旧跡のあらましに過ぎず。委しき事を知らむとならば、おのれが別に物したる都のいぬるてふ書を蘊けよ」（嵯図、p45）とした。

また「保津、天龍、大井諸大川の疏鑿者、古来稀有の大企業家」（嵯図、p8）角倉了以の偉業を顕彰する了以会の有力メンバーであり、小倉百人一首<sup>17</sup>で有名な藤原定家の小倉山荘・厭離庵など「名跡にしあれど、年経るままにあれ行きて、今ハみすほらしき小庵を残し…斯る名勝のすたれゆくをいかにすべきかは」（嵯図、p28）、「嗚乎、此靈源聖跡、草蕪に委して顧みざるの道俗、其れ古人に愧るなきか」（嵯図、p38）などと、荒廃した名所旧跡の保存・修復活動にも同志とともに積極的に取り組んだ。さらに『嵯峨名勝案内図会』の巻末に9頁の英文要約を付したり、後述の嵯峨遊園の手で「保津川下り外人専用の便所を新設」（M44.8.25日出）しようと

するなど、京都鉄道ともども外人観光客の受入れに早くから取り組んだ。また愛宕神社信者代表として「社殿が余り貧弱であり、ケーブル開通後あれではいかぬと云ふので…社殿を改築」(編入, p24)、大正10年には『愛宕は日本の霊山である』という葉を刊行して「団体参詣を促がす」(編入, p24) 団参会本部の代表も務めた。

銀行家の側面からの検討は別稿<sup>98)</sup>に譲るとして、俳人・小林の生涯を観光業者という狭い視点から矮小化すれば、彼の全行動は嵯峨・嵐山の地域振興・観光振興という一点に集約できそうである。しかし彼の家業ともいうべき嵐山焼も金融恐慌の打撃を受け急速に衰退し、昭和11年12月22日「銀行破綻ト共ニ全私財ヲ提供シテ鋭意整理ニ狂奔セシカ、刀折レ矢尽キ遂ニ及バズ、昭和十一年遽カニ病ヲ得テ急逝」<sup>99)</sup>した。

### 3. 嵐山温泉・嵐峡館

京都の東山には明治6年創設の「人工温泉」吉水温泉や円山鉾泉があり、温泉の疑似体験を庶民に提供する遊興施設として人気を集めていたが、これらに刺激されて嵐山にも温泉を導入しようとする試みは古くから何度も行われた。例えば明治10年「嵯峨の天竜寺にて風呂場を建て温泉にして、此せつ諸人を入れるので、紅葉にかけてだいぶ人々が出かけ」(M10. 11. 16 読売) という。野崎左文は「同所〈大悲閣〉より西北に下りたる処に温泉場あり、明治十年の発見にし〈て〉炭酸泉に属す。舟を大堰川にうかへて嵐峡の風光をもてあそぶ者は概ね此温泉場を以て限りとす」<sup>100)</sup>と紹介している。小林は「花の湯」を「維新後の築造に係る。嵐峡より涌出する鉾泉を温めて、入浴に供す」(乾, p42) とし、大悲閣より「数町にして屹立せる大巖あり。赤岩と称す。花の湯てふ礦泉其上に在り、一浴せば心身おのづから爽かなるべし」(嵯図, p10) と紹介している。

元録山町の「嵐山の東麓路の究まる所」(M28. 9. 3 日本) に江戸時代初期の豪商・角倉了以による民活投資の資金回収のために創設された「筏改所」という官衙がなお存在し、嵐山の風光を阻害していた。この由緒ある「民活第一号」<sup>101)</sup>跡地に「嵐山待賓館」を建設する話が持ち上がった。すなわち「洛西嵯峨地方の有志者は今回京都紳士等の賛同を得て、嵐山の麓なる元筏改所に宏壮なる屋舎を建築し内外貴賓の接待所、有志者倶楽部となし併せて旅館及び和洋料理を営業を為す見込にて、同地の貸下を發起人井上与一郎<sup>102)</sup>外数氏より府庁へ出願せり。同地所は昨年の通常府会にて不用貸下げを為すの決議を経たるものにて、建築費は一万円内外の予算なりと云ふ」(M28. 8. 30 日出) と報じられた。日出新聞のコラム「月下虫声」は「嵐山に待賓館の設立甚妙なり。高雄にも宇治にも醍醐にも大原にも設立すべし。損の行かぬ限りは」(M28. 8. 31 日出) と応じた。嵐山待賓館の記事はやや茶化して中央紙(M28. 9. 3 日本) にも転載された。

待賓館構想は明治30年4～6月にかけて以下の①～④各記事の通り嵐山温泉場新設、嵐山温泉(株) 発起へと順次具体化していく。①「京都鉄道の開通以来嵯峨付近は遊客絶へず頓に賑ひ

を増したるを以て、同地方の風間嘉平治、日下部大助<sup>23</sup>氏等発起と為り、資本金三万円の株式会社を創立し、大悲閣付近に温泉場を新築して旅人宿を兼業し、府下名産の委託販売をも為んとて、昨日同地に発起人会を開きたる由」(M30. 4. 21 日出)

②「此程発起認可となりし嵐山温泉会社は来る二九日午前十時より嵐山洗心亭に於て創業総会を開き、定款を議定し役員を選挙するよし」(M30. 5. 25 日出)

③「創業総会を開き、定款を議定し創業費百六十円に限定し次に重役の選挙を行ひしに取締役には風間嘉平、中路関之助<sup>24</sup>、関一馬、日下部大助、大八木良民<sup>25</sup>の五氏、監査役には村岡浅右衛門<sup>26</sup>、井上与一郎の二氏孰れも当選したるよし」(M30. 6. 4 日出)

④「社長互選 嵐山温泉株式会社にては一昨日重役会議を開き、互選を以て風間嘉平氏を社長に推薦したるよし」(M30. 6. 6 日出)

嵐山(らんざん)温泉株式会社は明治30年6月資本金3万円で江戸時代初期の豪商・角倉了以が設置した筏改所の跡地・元録山町11番2に「温泉浴場席貸料理遊船旅宿業」(諸 M39, 上 p223)を目的に設立された。『株式会社統計』によれば明治28年現在で全国には奈良遊園(株)、平野鉦泉(株)など先発の遊園・鉦泉会社が既に複数存在した。しかし大正8年時点の調査でも京都府下の旅館ホテルで株式会社形態なのは都ホテル1社(通覧, p183)であったから、明治30年設立の同社は京都ではかなり先駆的であろう。設立の中心人物は専務取締役役に就任した風間であったと考えられる。角倉了以が保津川開鑿工事の犠牲者の菩提を弔うために創建した大悲閣の直下にある敷地の山林は風間の所有であり、明治30年5月8日「郡村宅地之開墾届出」(元録山町11番2土地台帳)があり、すぐに建築に取り掛かったと見られる。監査役に就任した小林自身の筆になる『嵯峨名勝』は「麓なる緑陰深き処、溪声耳を洗ふの辺に一大温泉場あり。近年桂の風間氏等が設立せしもの。嵐峡館の称あり。浴室及座敷の構造装置清楚を極む。一浴後美酒佳肴を命するは最も可」(嵯名, p8)と身内の嵐峡館を自画自賛している。

開業直後の明治32年には「営業…温泉及旅人宿、資本金三万円、嵐山温泉株式会社、葛野郡松尾村」(商 M32, ろ p115)とあり、明治39年時点では払込2.5万円、専務先代・風間八左衛門、常務中路関之助、取締役日下部大助、村岡浅右衛門、風間嘉一(明治40年風間八左衛門を襲名)、監査役井上与一郎、小林吉明であった。(諸 M39, 上 p223)

嵐峡館発行の「創業十周年記念嵐山温泉風景絵葉書 嵐峡館 電話 嵯峨一番」(四枚組 綾小路通麴屋町西入 山口青旭堂絵葉書部印行)には、①保津川の北岸からの嵐峡館全景、②「大悲閣道」の石碑、③「大悲閣道」側から見た嵐峡館の裏側、④背後の嵐山の四枚が含まれている。また「写真-2」の「温泉創業拾周年記念 嵐山・嵐峡館 1907」の青スタンプが押された「嵐山温泉 嵐峡館」全景(上記①と同一ネガ)の絵葉書には1907年とあるので、ともに明治40年発行と考えられる。しかしこの時点で嵐山温泉(株)の社名の併記はなく、かつ「創立十周年」ではなく、「創業十周年」となっている。また明治41年9月20日敷地(元録山11-2)の所有権は売

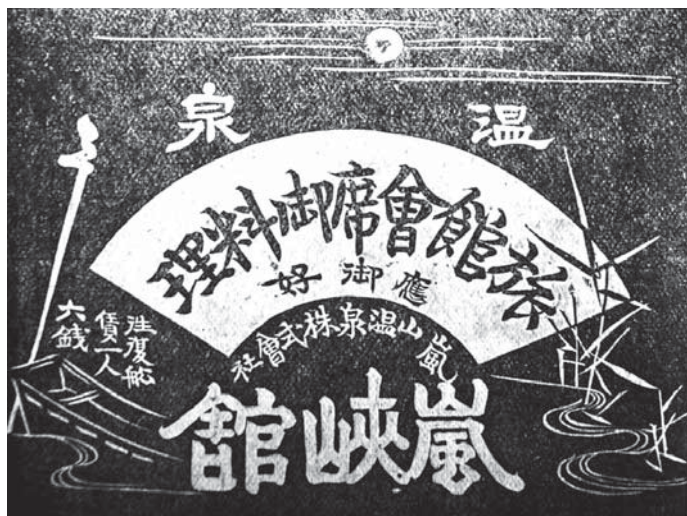


写真－2 嵐峡館「温泉創業拾周年記念」絵葉書（明治40年）

買により風間八左衛門から義弟の中路重之に移転した。（元録山11番2土登）商業登記簿の保存年限を経過したため、年月は未確認であるが、このころを境に風間家が主導してきた経営主体の嵐山温泉（株）が解散し、次第に親戚筋に当る中路家の家業に移ったものと思われる。その後大正14年11月29日「浴場旅館並料理屋ヲ営業」（商登）する目的で合名会社嵐山温泉嵐峡館が中路一族の出資<sup>77</sup>で元録山11-2に設立された。（商登）昭和7年では『大京都誌』の中で、「営業収益税年額七十円以上を納むる」京都の「著名旅館」（大京、p612）、「料理及仕出し弁当」業者として「氏名 合名会社嵐山温泉嵐峡館 家号 嵐峡館 住所 嵐山」（大京、p615）として記載された。昭和16年11月25日合名会社嵐山温泉嵐峡館は「総社員ノ同意ニ因リ解散」（商登）、新たに株式会社嵐山温泉嵐峡館が設立された。

旅館としての営業振りや世評を採る資料として、以下に管見の限りでの案内書等に掲載された嵐山温泉の紹介記事等を年代順に掲げておく。明治32年旗亭・八賞軒を買収した川崎正蔵も嵐山温泉の初期の利用者で、「嵐山温泉又老を養ふ可く、労を慰するに恰好にして幽邃の別天地」（川崎、p330）と気に入っていたようである。京都鉄道が明治34年8月24日に最初に企画して運転した「観月列車」のイベントでは「列車が崑石の隧道を越えて、嵐山温泉前で停車すると同時に仕掛火花が又もや盛んに紅紫の花を咲かせ、仕掛の錦魚が月隅の溪流を幾百尾となく遊泳すると、温泉の山一面は花のやうに灯が点る、六斎の祇園囃子を演じ出すといふ趣向で、いずれも乗客の意表に出づるなど秀逸の余興である」（M34.8.31R）と嵐山温泉側でも京鉄に全面協力して乗客サービスに努めた。このように友好関係にあったため、大江理三郎<sup>78</sup>編『京都鉄道名勝案内』では嵐山の大悲閣山麓にある、嵐山温泉株式会社経営の温泉旅館嵐峡館について、巻末に「嵐山大悲閣麓 四時風景絶佳 温泉／旅館会席御料理 応御好 嵐山温泉株式会社 嵐峡館 往復





写真－３ 嵐峽館広告（『京都鉄道名勝案内』，明治 36 年）

船賃一人六銭」との広告〔写真－３〕を掲載した上、本文でも「其奇しき巖根の上に雅致を極めた建物は嵐山の温泉嵐峽館、或る種の薬分を含める冷泉を汲んでの浴槽室前の飛瀑室後の閑亭、欄にもたれて、碧潭に望む、山肴海珍は拍手一つ、お悪くはありますまいでせうよ」<sup>29)</sup>と好意的に紹介している。同時期の案内書にも「嵐山 桜楓の名所にして…渡月橋…嵐山温泉等見るべき所一にして止まらず」<sup>30)</sup>、「沿道重なる旅館 嵯峨駅…嵐峽館」<sup>31)</sup>とあるが、『避暑案内』では「株式会社嵐峽館と称する温泉兼料亭あり」<sup>32)</sup>と旅館名と社名を混同している。

小林は明治 43 年 10 月温泉嵐峽館について「嵐山の奥、大悲閣の麓にあり。矢張料理旅館兼業、浴場其他の設備よし」(嵯名, p47) と評している。例えば小林自身も嵯峨村長として参加した「了以会」幹事会は「大悲閣千光寺に於て開催…嵐峽館に於て昼餐を喫し」(M43. 6. 14 日出) ているなど、当初の目論見通り「地方有志者の倶楽部」としても機能していた。

「此の（嵐山大悲閣）西北山麓に温泉場あり四時浴客絶へず」<sup>33)</sup>、大正 2 年では嵯峨村、電話一番（旅館, p97）、大正 5 年では「温泉料理旅館嵐峽亭は嵐山大悲閣の麓にあり…大悲閣の麓迄渡船の便あり」(案内, p856)、「千鳥淵…身は画図の間を行くが如し。二十分にして山下の温泉下に着く。温泉は嵐峽亭と云ふ。一浴して大悲閣に登も可なり、新鮮な川魚料理を味ふも又可なり。料理温泉旅館 松尾村上山田 嵐山の奥、大悲閣の麓 嵐峽館 電話嵯峨一番

陸行舟行何れも便利、嵐峽湧泉の最新式浴場、客室大小数多く、之れ皆清麗、館は川に臨み後に山を負ひ、空気新鮮、小鳥は梢に囀り、舟筏楼を通じ、真帆片帆汽車は対岸の隧道出て川に沿ふて走るあり。其の風景名画も亦若かず」(案内, p868)

大正 6 年 11 月山本實彦も川崎正蔵ゆかりの「嵐山温泉の風勝を三嘆しつつ、八賞軒に入り」(川崎, p330) 川崎の趣味を追懐した。大正 6 年田山花袋は「舟で川を遡る…瀟洒な茶楼の水に臨

んで構えてあるのが段々見え出して来た。舟を捨てて岸に上る。いかにも好い。その温泉の旗亭の川に臨んだ一間で、半日の清興を恣のままにするのも、また旅の興の一つでなければならない」<sup>34</sup>、「京都の嵐山の奥にある温泉、あれなども人は大騒ぎをして出かけた。炭酸泉で、温度が摂氏の十一度と言ふのだから、さう大したものではないのであるが、温泉に乏しい近畿地方では、これでも頗る珍としなければならなかった。それに、京都に近いので、その旅舎の設備は、温泉といふ名に呼んではゐるけれども…金もかかるし、おうと落付いてゐられるやうな処でもなかった。それでも、花か紅葉の時に、舟をそこまで曳かせて上って来て、川に臨んだ欄干に凭れながら、静かに盃を含むのもまた旅情を慰める一つである」<sup>35</sup>

昭和7年では『大京都誌』の中で、大悲閣「麓の緑陰深き所に『嵐峡館』といふ温泉場がある。浴室及び座敷の構造は清麗で、付属の亭榭屋に倚り、水に臨み、風光絶佳である」(大京, p703), 昭和11年では「北麓の河畔に嵐山鉦泉嵐峡館がある」<sup>36</sup>とし、JTBは嵐山温泉を嵐山鉦泉として「嵐山の麓、嵐峡の清流に枕みて、亀山の翠微と相対する景勝の地にあり、渡月橋畔から遊船の便がある。鉦泉は無色透明の炭酸冷泉で、胃腸病・神経衰弱・リウマチスなどに効くと云ふ。旅館 嵐峡館(嵯峨駅から二軒、電嵯峨一、室五〇、普通一泊四、五、七円)<sup>37</sup>と紹介する。

#### 4. 嵐山公園開設と嵯峨遊園会社設立

小林は「この一帯の国有林は昔から鋸を入れぬ数百年来棄ててあったやうなものである。之を私が在職中に嵯峨村へ払下げを受けて基本財産造成の事を企てた事があったが、それはその筋の許すところとならず出来なかった」(編入, p25)と回顧している。明治末期に「亀山国有林一帯の敷地を〈葛野〉郡に下附されん」(M43. 7. 3日出)と「葛野郡有志者より嵐山公園設置に關し其筋に申請し、昨〈42〉年の府会に於ても同公園設置に就ては府より補助を与ふることとなり」(M43. 1. 16日出), 明治43年6月30日葛野郡の事業として認可され、当初は亀山公園と称した。明治43年1月15日葛野郡参事会員らは嵐山公園設置は「未だ許可の指令なく、来る四月までには嵐山電鉄も成工すべきにより、同時に公園をも竣成せしめんには一日も速かに許可の指令を迫るの要あれば、此際委員を選定東上せしめ、内務省に嘆願することの協議を為し」(M43. 1. 16日出), 「桜井郡長、小林嵯峨村長等は態々東上して当局に具申」(M43. 7. 3日出)した。内務省への嘆願が功を奏し明治43年6月30日付で「亀山一帯の国有林を公園敷地に編入するの件」(M43. 7. 3日出)が正式に認可された。葛野郡では認可を受け、「設計は工学士武田五一氏に囑託し、遅くも本年の秋季紅葉の時季までには完成せしめん」(M43. 7. 5日出)という意向のもとに「設備費として本年度に於て郡費より約四千元を支出し、伐採したる松樹を売却して一千五百円内外を得る見込」(M43. 7. 3日出)とごくささやかな目算を示した。

小林は明治43年10月刊行の案内書の中で「亀山を一大遊園となして嵐山公園と称し以て内外の観光客を満足せしめむとは吾等有志が多年の宿願なりしが、頃日漸く官許を得、茲に世界の楽

園を現出するの運びに至れり。八賞軒の後より所謂亀の尾の松林を縫ふて漫步を運べばやがて一望快濶の丘頂に達すべし。…遊覧者も此処に至りてこそ実に嵐峽観光の極致を得たるものなれ。さるにても、年久して閑却せられたる此勝境を公開して飽く迄四時の風物を味はしめ以て、亀山離宮の當時を平民的に復旧し得たるはかへすがへすも吾等地方人の痛快とする所なり」(嵯名, p19) と多年の宿願の嵐山公園開設が実現したことを痛快とした。当初「同村記念事業として亀山公園<sup>ママ</sup>開設を企てたが、これは明治四十四年に至って種々曲折があったが希望通りになった」(T12. 3. 26 日出) とされるように嵯峨村主導の公園開設には財源不足の難問が不可避であった。そのための民活導入策が嵯峨遊園株式会社の設立背景と考えられる。

嵯峨遊園は明治 44 年 8 月 22 日「午前十時より嵯峨公会堂に開会、出席者は委任状共五十名にして、小林吉明氏座長席に着き先づ重役の選定を行ひ、取締役に嵯峨村寸田喜兵衛<sup>(38)</sup>、同小林吉明、同小松美一郎<sup>(39)</sup>、松尾村北村佐一、桂村風間八左衛門、監査役に嵯峨村井上与四郎<sup>(40)</sup>、太秦村加藤讓三郎、大内村竹内新三<sup>(41)</sup>の諸氏当選したるが、資本金を三万円とし、第一回払込は七千五百円なるが、同会社の目的は近来嵯峨地方は交通機関の完備と共に遊覧者頗る増加したるを以て、此際亀岡公園中眺望佳なる場所を選び、五、六の建物を新築し公衆の便益を計るものと認むるものに限り貸与すること、保津川下り外人専用の便所を新設する事等にして、営利を専らとせず、成る可く公衆の利便に資する筈なり」(M44. 8. 25 日出) と報じられた。

嵯峨遊園は明治 44 年 1 月 25 日葛野郡会で決議された「葛野郡嵐山公園管理規程」第 4 条に準拠して「公園ヲ使用セン」と申請し、「嵐山公園使用料規則」により場所によって異なる「使用料」を葛野郡に納入することによって、こうした官設公園内の飲食・遊興施設の民営代行業務<sup>(42)</sup>を企画したものと推定される。社長小林吉明、取締役寸田喜兵衛、小松美一郎、風間八左衛門、北村佐一(松尾村)、監査役井上与四郎、竹内新三、加藤讓三郎(太秦村)、会計主任渡辺鹿之助、外交係小林多三郎<sup>(43)</sup>(諸 M45, 上 p306) の陣容で大正 5 年では資本金 3 万円(内 10,500 円払込)、北村佐一に代り山下米次郎(松尾村)が取締役に就任していた。(帝 T5, p35)

「嵐山公園其他嵯峨及松尾ノ勝地ニ於テ四時ノ遊覧者ニ便利偕楽ヲ与フヘキ諸種ノ場屋ヲ賃貸シ、併セテ同地方風致保存ノ経営ヲナス」(M44. 9. 9 官報, p196) ことを目的に京都府嵯峨村字天竜寺小字大雄寺五番地ノ一<sup>(44)</sup>に資本金 3 万円、総株数 600 株(一株@ 50 円)で設立された。嵯峨遊園(明治 44 年 9 月設立、遊覧場賃貸)は大正 5 年時点で電話五三番、「利益配当 前期及前々期五分」(諸 T5, 上 p372)、積立金 930 円、利益金 722 円、配当率 5% (通覧, p183) を維持できた利益の源泉は葛野郡に対して嵯峨遊園が納入する嵐山公園使用料と、「遊覧者ニ便利偕楽ヲ与フヘキ諸種ノ場屋」の実際の経営者から嵯峨遊園が徴収する賃貸料との差額から発生しているものと考えられる。会計主任は実際の経営者から賃貸料を徴収する職務を、いかにも銀行風の呼び名の「外交係」(外務主任に変更)の小林社長直属の小林多三郎(恐らく小林家の関係者か)は嵯峨遊園が建設した「諸種ノ場屋」の借り主を見つけるなど、テナント管理業務を担当したと

考えられる。大正7年時点では外務主任小林多三郎、会計主任渡辺鹿之助であった。(諸 T5, 上 p302)

第八期(大正8年6月期)決算では資本金3万円, 払込10,500円, 出資人員53名, 積立金2,070円, 「諸種ノ場屋」の建築費と天竜寺出張所内の会社所属の什器備品からなる「建物什器」11,195円, 預ケ金及現金2,492円, テナントからの賃貸料からなる「当期総収入金」2,011円, 葛野郡への公園使用料を含む「当期総支出金」1,289円, 当期純益及前期繰越金949円, 配当(年5%, 前期5%)505円で長らく5%配当を継続していた。(帝 T8, p40) 社長小林吉明, 取締役風間八左衛門, 寸田喜兵衛, 小松美一郎, 山下米次郎, 監査役竹内新三, 井上与四郎, 加藤讓三郎であった。(帝 T8, p40)

嵯峨遊園が新築した「五, 六の建物」(M44. 8. 25日出)の全貌は明らかにできなかったが, 少なくとも判明するのが草庵「八賞軒」である。川崎正蔵は明治32年「京都嵯峨に一別荘を建築」(川崎, p177)した。「嵯峨の別荘は翁と由緒深き天龍寺と隣して, 前面には藍を流したる如き保津川の清艶なるあり…別邸と続きに雅麗を極めたる大谷光瑩伯の別荘あり。粹人騷客に持て囃さるる花の家あり。翁の別荘は以前は八賞軒と称し, 嵐山にて有名なる旗亭の一なりしが…今此絶勝の地を見て, 好風癖は勃然として起り, さては独占して徐ろに老を養はんとして買収せるもの」(川崎, p328~9)であった。川崎は「此別荘に天竜寺の老僧, さては郡長, 神官等を招致して鳥鷺を闘はし」(川崎, p330), 「松方, 井上侯等を招請して一夕の歓を尽」(川崎, p330)したが, この折に松方正義は別荘・八賞軒の名を「延命閣と命名」(川崎, p330)した。



写真-4 渡月橋から三軒家, 嵐山公園を望む絵葉書(年代未詳)

[写真-4]は渡月橋畔から三友楼, 三軒家から上流の嵐山公園方面を望む絵葉書で, 明治43年刊行の『嵯峨名勝』では「三友楼, 三軒家, 廓公, 対嵐山房(東本願寺別荘), 八賞軒等軒を連ねて何れも風光水色を領せり。先年洛の文人八賞軒に集りて八賞の吟あり」(嵯峨名, p13)と谷如意ら8人による嵐山八賞詩を掲載している。八賞軒の跡地に建つ「ホテル嵐亭 HP」によれば「ホテル嵐亭の設立は, 明治32年に川崎造船所創始者の川崎正蔵氏が現在地に別荘「延命閣」を, また, 明治43年には嵯峨遊園株式会社「八賞軒」を建設したことに端を発し



ております。その後、昭和11年には山口玄洞氏、昭和18年鴻池善右衛門氏、昭和28年林原一郎氏が所有し、昭和37年株式会社京都ステーションホテルが当時、カバヤ食品株式会社名義となっていたものを購入いたしました<sup>46)</sup>とある。

また嵯峨亀ノ尾町無番地に立地する料理旅館「千鳥」（現嵐山祐斎亭）の経営者・小林太一郎も昭和18年10月17日から昭和24年4月11日辞任するまで嵯峨遊園監査役に就任（商登）しているため、当然ながら嵯峨遊園との賃貸関係など深い地縁関係の存在が推測される。このほか嵯峨亀ノ尾町の官有（無）番地に立地する家屋番号八番の「居宅」「店舗」（建築年次の記載なし）<sup>46)</sup>も後年になって昭和27年12月24日嵯峨遊園の名義で所有権の保存登記が行われており（土登）、同社の官有地上の店舗賃貸業という独自のビジネスモデルが戦後まで長く継続されていたことが判明する。

小林の死後、長男の美樹雄（明治29年生れ、嵯峨銀行清算人）が昭和13年7月29日嵯峨遊園取締役に就任（商登）したが、本業は繊維・染色関係の同業組合役員を経て、戦後は京都染織会館理事等を歴任した。美樹雄も亡父の遺志を継ぎ廃絶した「嵯峨焼復興にいどんだ」<sup>47)</sup>が、小林家の家業的色彩を強めていた嵯峨遊園代表取締役在任中の昭和49年4月25日死亡した。（商登）

## 5. むすび

「嵯峨町ヲ忽チ荒廃セシメ延テ町民生活ノ安定ヲ喪ハシメ死活問題ヲ生スルモノ」との嵯峨町民有志代表委員を名乗る愛宕山鉄道反対派の主張に対して、風間は昭和3年6月6日京都府知事宛に愛宕山鉄道社長名での以下のような「上申書」を提出した。「嵐峽カ天下ノ名勝タルハ今更論スルノ要ナク、交通機関ヲ完備シ、之ヲ広ク天下万人ノ前ニ展開シテ其觀賞ニ供シタル結果ハ、抑モ嵯峨町ノ利益ノ増進ニ非スシテ何ソ」「鉄道ハ文化ノ先駆文明ノ象徴ナリ。然ルニ之ヲ危険物又ハ不体裁ナリト断スル如キハ現代人トシテ唯々奇異ノ感ヲ抱クモノ」<sup>48)</sup>であり、結論として「此反対運動ハ真面目ニ嵯峨町ノ利益ヲ計策シテノ基礎ニ立脚セルモノトハ断スルヲ得サルモノ」<sup>49)</sup>とした。

次に小林吉明の嵯峨・嵐山地域の観光振興の基本的な考え方としては次のようなものであった。「一体この嵯峨と云ふものが、殊にこの嵐山は普通の勝地と異って、既に世界的勝地として内外の貴賓が絶えず来訪する所であり、従来京都市としても何等自分の費用を入れずして恰も自分の庭園のやうな顔をして内外のお客さんを待遇してゐると云ふ場所である」（編入、p14）と、京都市への精一杯の皮肉を述べつつも、嵯峨・嵐山地域が「事実上大きな遊覧地帯となって、新京都市のために活用さへすれば…名は何であつても結構だと思ふ…殊に之は大京都市の西山に新遊覧地域が出来るのでありまして、之を巡る名所旧跡…をそのまま大事になって、その裏に回ったところで、さう云ふ新しい遊覧地を作ると云ふ事は…何等風致を損すると云ふ議論の起る事なしに…嵯峨に大きな繁栄を齎らし、同時に大京都市の繁栄を来たすのであります」（編入、p22）

として、風致を損することなき新しい遊覧地を作らねばと主張した。

結論として小林は「今更〈京都市への〉編入を拒むと云ふ事は穩当を欠く」（編入、p7）として「条件付編入」を主張、「この講座筆記を府市当局、その他広く内外有志に配付して見て頂いて、その批判を仰ぎたい」（編入、p69）として嵯峨町長として編入の希望条件<sup>50)</sup>を具体的に列記した小冊子『京都市編入と嵯峨地方』を刊行した。また風間・小林の同志である小松美一郎も嵐山保勝協会の「会長をして、色々保勝上の事について熱心に奔走し…高雄・清滝間の歩道を先づ先に拵へ」（編入、p33）ようとした。

こうした風間・小林・小松らの実行してきた一連の観光振興策に対して、山口敬太氏らは「嵯峨を少女歌劇や新温泉でにぎわう宝塚<sup>51)</sup>のようにするな」との近藤伊与吉の主張を紹介して、「作家や画家などの行政以外の立場の人々の間では、行政の訴える風景の活用と保全は必ずしも評価されていなかった」<sup>52)</sup>、「嵯峨野においては『懐古的・有閑的』な満足を得るための風景に価値は見出されず、宅地開発や公園事業などを通じた環境整備による経済発展が重視された」<sup>53)</sup>との批判的見解を示した。

しかし筆者は小林は単に嵯峨村長・町長であったというのではなく、代々大覚寺門跡に仕え、双湖庵桂陰と号した俳人であり、嵐山焼の窯元であり、『旧嵯峨御所大覚寺門跡要録』の編集など数多く名所旧跡の由緒沿革を紹介した文人、そして自らも祇王寺の再興など数多くの名所旧跡の保存に尽力したとして藍綬褒章を下賜されるなど、人文的環境保護者としての一面をも併せもっており、決して開発重視一辺倒の地方官吏ではなく、むしろ「おのれ嵯峨にすみ常に名所旧跡の間をさまよひ」（嵯図、巻末）歩く、懐古的・有閑的ともいふべき文人タイプであったと考える。そして「趣味の人であり、芸術家肌の人」（T12. 3. 26 日出）と評された文人派首長によってはじめて、大都市の京都市に隣接するという地勢学的開発リスクの中で住民の暮らしを成り立たせつつも嵯峨・嵐山の歴史的景観を現在の水準までなんとか維持を可能ならしめた持続可能な観光振興の先駆者たる側面もあるのではないかと考えている。

## 注

- (1) 例えば杉野紈明氏の『観光京都研究叙説』は嵐山温泉嵐峽館にも言及する浩瀚な京都研究書であるが、「戦前の京都では、温泉が地下より湧出するということがなく、その意味では温泉とは無縁であった」（杉野紈明 『観光京都研究叙説』2007年、p563）と戦前の鉱泉類の一切を捨象し、視座に入っていない。たとえば鞍馬温泉でも明治44年硫黄を含む天然の冷泉採掘が行われ、鞍馬街道を行き交う人々に利用されたという。（平成16年10月4日『京都経済新聞』）
- (2) 川崎正蔵に関しては三島康雄『造船王・川崎正蔵の生涯』平成5年参照。また柴孝夫氏からも種々ご教示を賜わった。「嵯峨の発展を妨げる…土地思惑買」（T12. 3. 29 日出）は「土地の人の手を離れ転々とした後、阪神地方から遠くは東京辺の土地思惑師の手に帰し…初めから住宅を建築する意志は毫末もない。

ただ土地のみを売買し巨利を得やうとする」(同上)と批判された。

- (3) 商登…商業登記簿, 土登…土地登記簿, 土台…土地台帳, [新聞・雑誌] R…鉄道時報, 日出…京都日出新聞, 東朝…東京朝日新聞, 読売…読売新聞, 日本…日本新聞, 大毎…大阪毎日新聞, / [会社録] 諸…『日本全国諸会社役員録』商業興信所, 要…『銀行会社要録』東京興信所, 紳…『日本紳士録』交詢社, 帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所, 商…『日本全国商工人名録』, 人…『人事興信録』人事興信所, 日韓…『日韓商工人名録』明治 41 年, 実業興信所, 商信…『商工資産信用録』商業興信所, 実辞…『実業家人名辞典』明治 44 年, 名士…『名士と其事業・覇者録』, 旅館…『帝国旅館全集』大正 2 年, 鉄軌…『地方鉄道軌道営業年鑑』昭和 4 年, 人鑑…大須加福市『昭和九年版 日本人事名鑑 上』連合通信社, 通覧…農商務省編『会社通覧』大正 10 年, / [頻出資料] 風間…『風間八左衛門氏之件』商業興信所調査, 日銀 #1003, 編入…小林吉明述『京都市編入と嵯峨地方』昭和 5 年, 史右…『史料京都の歴史 14 (右京区)』平凡社, 平成 6 年, 史西…『史料京都の歴史 15 (西京区)』平凡社, 平成 6 年, 嵯材…『京都嵯峨材木史』嵯峨材木, 昭和 47 年, 三電…『三電工・六十年のあゆみ』昭和 63 年, 三和電気土木工事, 生活…太田光熙『電鉄生活三十年』昭和 13 年, 案内…『日本案内 下』開国社, 大正 5 年, 乾…小林吉明『都の乾』花の巻, 出版者山鹿条次郎, 嵯図…小林吉明『嵯峨名勝案内図会』明治 30 年, 嵯名…小林吉明(双湖庵桂陰)『嵯峨名勝』明治 43 年, 大京…野中凡童『大京都誌』東亜通信社, 昭和 7 年, 竹村…竹村俊則『昭和京都名所図会 洛西』1983 年, 駈々堂出版, 川崎…山本実彦『川崎正蔵』大正 7 年, 変遷…『本邦銀行変遷史』銀行図書館, 平成 10 年

(4)(8) 『興亜之事業六百名士鑑』昭和 14 年, 興亜之事業社, p242

- (5) 明治 32 年 12 月風間嘉平が家督を相続し風間八左衛門を襲名し, 先代八左衛門は隠居名の宗堅を名乗った。(32. 12. 3 日出, 改名広告)

(6) 野依秀市『明治大正史』13 卷人物篇, 実業之世界社, 昭和 5 年, p24

(7) 『京都電灯五十年史』, 昭和 14 年, p308

(9)(19) 「株主個別事情調査」昭和 18 年 7 月, 『第二別口 回議 嵯峨銀行』日本銀行(日銀アーカイブ #1003)

(10) 「貴族院議員風間八左衛門貴族院議員ヲ免スルノ件」昭和 17 年 2 月 7 日『任免裁可書』(国立公文書館蔵)

- (11) 風間嘉雄(桂木ノ下町)は明治 33 年 2 月 24 日先代風間八左衛門の長男に生れ(『大衆人事録』14 版, 昭和 16 年, p26), 昭和 20 年 1 月 25 日嵯峨遊園取締役就任(商登)

(12)(14) 『新日本人物大系』東方経済学会出版部, 昭和 11 年, p537

(13) 「京都府葛野郡嵯峨村勲七等小林吉明藍綬褒章下賜ノ件」大正 4 年 12 月 2 日裁可(国立公文書館蔵)

- (15) 毎日新聞京都支局編『嵯峨野』淡交社, 昭和 39 年, p125。毎日記者の取材先小林吉明長男も何度も嵯峨の窯場の再興に努めたが果せなかった。なお初代閑嵯の後継者が主宰する「陶器電元清風亭」の取扱品目にも「三楽舎受託嵐山焼」(案内, p868)を掲げており, 「嵐山焼」は小林が仲間と組織した「三楽舎の陶器」(案内, p875)ブランド名であったが, 後に永豊が「焼物の名を“嵯峨焼”とかえた」(前掲『嵯峨野』p125)と考えられる。

- (16) 小林吉明『嵯峨町政の過去及未来』昭和4年
- (17) 跡見学園女子大学も藤原定家ゆかりの百人一首古写本の収集を長年継続し、所蔵史料の一部は小倉百人一首の石碑群として現地を訪れる観光客にも公開され、嵯峨・嵐山の観光資源ともなっている。(嶋田英誠「京都の秋、ならびに小倉百人一首」WEBサイト『学長室からの花便り』第144便、平成21年11月28日参照)
- (18) 地方金融史研究会夏季合宿報告「大正期京都近郊の銀行頭取と不動産開発・観光業—愛宕銀行と嵯峨銀行を事例に一」(平成22年8月31日於地方銀行協会)
- (20) 野崎左文『漫遊案内』明治30年、博文館、p200
- (21) 角倉了以が「古来稀有の大企業家」(嵯図、p8)である所以は近世期に有料運河開鑿という巨額の公共投資を民間代行し、かつ投下資金の長期回収システムまで確立・実行した点にある。(『民営社会資本の歴史は拙著『民間活力による社会資本整備』昭和62年、鹿島出版会参照)なお明治22年3月19日「名區勝地ニ達スル道路」として「嵐山道」が「三條通郡區界ヨリ…渡月橋ニ至リ一ハ字三軒家ノ西浮筏改所門前ニ達」する路線が定められた。
- (22) 井上与一郎(嵯峨村下嵯峨)は安政3年生れ、「井上家は江戸時代には大覚寺に勤仕する一方、北嵯峨村の年寄もつとめていた上嵯峨村の旧家。明治以降は戸長や村長などを務め…代々名前の一部に与の字を付けていた」(史右、p46)、明治39年出願の嵐山電気鉄道発起人(原敬文書研究会『原敬関係文書』第8巻、日本放送出版協会、昭和62年、p475)、嵯峨銀行監査役(諸M40、上p235)、清滝川水力電気取締役(日韓、上、p115)、京都府郡部選出代議士、勲四等、了以会員、明治40年11月22日死亡(大植四郎『明治過去帳』昭和10年、p1049)
- (23) 日下部大助(葛野郡小野郷村小野)は上村の庄屋の家に生れ、明治32年7月『白杉北山丸太培養法』を著した京都北山の林業家、屋号「大助」、生家は京都市指定登録文化財。類似の日下部太郎は清滝川水力電気監査役(日韓、上、p115)(『日本産業人名資料事典』第二巻、クp4)
- (24) 中路関之助(桂村下桂)は風間八左衛門の岳父=妻さくの父(人T7、かp132)、風間八左衛門家所蔵の「風間・中路氏先祖代々法名書上」(史西、p53)は風間・中路両家の姻戚関係を示す文書で、中路は「中村」らとともに旅館主(旅館、p96)
- (25) 大八木良民は(桂村)は明治28年時点では桂村長(史西、p234)
- (26) 村岡浅右衛門(紀伊郡上鳥羽村)は大地主(商M32、ろp119)、西陣貯蓄銀行副頭取(諸M39上p197)、明治40年の京都府第12位の多額納税者887,515円(日韓、上p115)、金貸(商信M42、p68)、明治28年8月30日創立の城河鉄道初代監査役(M28.9.3日出)、明治39年10月27日出願の宇治電気鉄道(伏見、宇治間5哩、資本金25万円)発起人(前掲『原敬関係文書』第8巻、p488)
- (27) 風間の義弟の中路重之(元録山11-2)[中路関之助の子、明治41年9月20日元録山11-2を風間八左衛門から買得(土登)、合名会社嵐山温泉嵐峡館社員、昭和26年7月11日死亡(土登)]、明[重之の相続人、代表社員1.5万円出資(商登)、長らく4代目の嵐峡館経営者(『日本観光年鑑』昭和32年、p5-25)、昭和



- 42年5月16日死亡（土登）、敏雄、研一の合計4名。「温泉は一株二十円の株式会社で…創立当時…京都の花街仲居…に至るまで一株二株を持たされた…現在ではそうした株主の手にあった株券は全部引上げられて居る」（T12. 3. 28 日出）との一族による買戻しを推測させる伝聞記事がある。
- 28 大江理三郎は明治38年8月現在では京都鉄道会計課書記（『帝国鉄道要鑑 第三版』明治38年、蒸、p409）。京都鉄道の運輸課員であった安東守男は「京都鉄道では外人の嵐山見物が多かった…嵐山の宣伝には随分力を尽し、ポスターをつくったり小冊子をつくったりして奮闘した。それが当たったので今度は『嵐山の四季』という俗謡をつくった」（青木槐三『鉄道黎明の人々』交通協力会、昭和26年、p231）と回顧する。京都鉄道に関しては老川慶喜『明治期地方鉄道史研究』昭和58年、p25 以下参照
- 29 大江理三郎『京都鉄道名勝案内』明治36年、p34～5
- 30 白土幸力『京阪名所案内』明治37年、p101
- 31 『帝国鉄道要鑑 第三版』鉄道時報社、明治38年、蒸、p410
- 32 安藤荒太『避暑案内』安藤文貫堂、明治36年、p45
- 33 森永規六『西部鉄道管理局線名勝遊覧案内 全』浜田日報社、明治43年、p86。森永規六は拙稿「牡丹の植栽・夜間点灯による“観光まちづくり” — 門前町・初瀬の観光マネジメントと観光カリスマ・森永規六の尽力 —」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第8号、平成21年9月参照。
- 34 田山花袋『山水小記』大正6年、p303
- 35 田山花袋『温泉めぐり』大正15年4月、p218。「今では猫も杓子も温泉々々といふ」（T12. 3. 28 日出）と嵐山温泉の評判が報じられている。
- 36 松川二郎『近畿日帰りの行楽』大文館書店、昭和10年、p44
- 37 ジャパン・ツーリスト・ビューロー『旅程と費用概算』博文館、昭和10年、p425
- 38 寸田喜兵衛（嵯峨村下嵯峨中道）は材木卸（資産 M42, p133）, 「材木 寸喜 同〈嵯峨〉村（電一五）」（案内, p875）, 七代嵯峨村長, 「メリケン松は寸喜, 松原, 野上, 小山の四店のみが取扱」（T12. 3. 27 日出）, 昭和5年3月7日死亡（商登）
- 39 小松美一郎（嵯峨村上嵯峨→嵯峨釈迦堂大門）は「小松家は…江戸時代以降は庄屋をつとめた」（史右, p54）, 「地方の名望家…前記銀行会社の重役として其名を知らる」（人 T7, こ p38）, 葛野郡会議長（T5. 2. 14 日出）, 京都府会議員, 合資会社錦商会業務担当社員, （株）銭屋商会専務取締役（帝 T5 職, p212）, 嵯峨遊園取締役（帝 T5, p35）, 嵯峨銀行取締役（『大日本銀行会社沿革史』大正8年, p94）, 初代嵯峨町長, 嵐山保勝協会会長として「色々保勝上の事について熱心に奔走」（編入, p33）, 愛宕山鉄道取締役（鉄軌, p375）, 玉川織布監査役, 嵯峨銀行旧 50 株主, 右京区選出京都市会議員・土木委員（大京, p29, 30）, 昭和22年3月14日死亡（商登）
- 40 井上与四郎（嵯峨村下嵯峨）は井上与一郎の長男, 嵯峨遊園監査役（諸 M45, 上 p306）, 嵯峨銀行監査役（帝 T5, p7）
- 41 竹内新三（大内村）は明治44年泉銀行が改称（変遷, p206）, 嵯峨村から朱雀野村へ移転した京都大

内銀行相談役（諸 M45, 上 p289）

- (42) 同種の遊園会社としては奈良公園内に「庭園亭舎及温泉場ヲ設ケ衆人ノ遊樂ニ供ス」（農商務省商工局編『株式会社統計』明治28年, p28）る奈良遊園株式会社が明治26年10月、資本金5千円で麻布商らにより設立された先例がある。郡が公園の財源に窮していたことは「嵐山亀山公園上の水道は葛野郡有志の醸金により昨年十月竣工したるが放水のまゝにて何等の設備なかりしを遺憾」（T5.2.2日出）としていたことからもうかがえる。
- (43) 渡辺鹿之助は嵯峨銀行天竜寺出張所主任（諸 M45, 上 p287）、嵯峨銀行新60株主、死亡「元行員ニシテ当行増資ニ際シ勤続特別賞与トシテ〈新株〉受領」（前掲「株主個別事情調査」、日銀 #1003）。小林多三郎（上嵯峨）は昭和3年4月9日洛西開発合資会社有限責任社員就任（商登）、昭和5年7月29日嵯峨遊園取締役就任（商登）、昭和6年3月19日小林美英と改名（商登）、昭和17年10月25日死亡（商登）
- (44) 設立一週間前の明治44年8月15日に開設されたばかりの嵯峨銀行天竜寺出張所の所在地
- (45) 「ホテル嵐亭」ホームページ
- (46) このほか明治末には嵐山公園地を所在地とする店舗として「席貸 嵐山公園地（電二三）ほととぎす 中尾善兵衛」（『日本案内 下』開国社、大正5年, p868）など数軒が存在した。
- (47) 前掲『嵯峨野』p125
- (48)(49) 昭和3年6月6日付京都府知事宛風間社長名「上申書」（京都府総合資料館所蔵）
- (50) 交通面の希望条件の例として「二条亀岡間を電化して…保津川の谷間にも〈停車場を〉二三ヶ所拵へる」（編入, p23）、「嵐山電鉄、愛宕電鉄と云ふやうなものを…新京阪の延長として会社を合併し…京都行線と愛宕行線との二に分けて改造する」（編入, p15）など。
- (51) 小林は昭和5年「之〈亀山〉は宜しく持主の個人をして何か経営をさせるべきである。或は組合と云ふやうなものにして一つ遊覧的に開発すると云ふ事にしたら、是丈でも立派な大遊園地であります」（編入, p25）と盛んに大遊園地開発を夢想していた。風間らが推進した戦前期の愛宕山鉄道・愛宕遊園地・愛宕山ホテルの建設・消滅については稿を改めたい。
- (52)(53) 山口敬太ほか「昭和初期の嵯峨における風景の価値評価に関する研究」『景観・デザイン研究論文集（1）』土木学会景観・デザイン委員会、平成18年12月、山口敬太ほか「嵯峨野の名所再興にみる景観資産の創造と継承に関する研究—祇王寺、落柿舎、厭離庵の再興事例を通して」『土木計画学会研究・論文集』24巻2号、平成19年年10月